海上観測 北半球が協力

天気予報精度向上 横断気球など検討

天気予報には欠かせない海洋上の大気の観測に北半球の国々が協力して取り組むことが決まった。気象庁は、米国、英国などの気象機関と「THORPEX（ソルペックス）」と呼ばれる研究に取り組む。日本の気象庁の天気予報は、翌日の予報の的中率が82%だが、7日後は64%にまで落ちる。これまで国内上空の観測情報はあるが、外洋上空の情報があれば、精度は上がると見込んでいる。

世界気象機関（WMO）の研究で、来年には各国の分担などの計画をまとめ、03年の実験開始をめざす。

日本がこの研究に期待するのは、週間天気予報だ。予報で欠かせないのが、現在の大気の状態。国内上空のデータは、ラジオゾンデと呼ばれる観測計器をつけた気球を全国16カ所から1日4回飛ばしている。上空約30キロまでの気温や気圧、湿度などのデータを地上に無線で送っている。

この観測データがほとんどないのが海洋上空。全世界の約9000カ所で行われているが、ほとんど陸上の上空。海上のデータがないのは同じだ。

そこで同じ北半球の国々が協力して、今後の観測態勢を探ることになった。

例えば北太平洋では、日本から気球を飛ばし、偏西風に乗って米国に向かう気球から、観測装置を次々と切り離す「ドリフトゾンデ」と呼ばれる方法が検討されている。